

2021年8月分総評 杉本真維子

今月の佳作からいくつか紹介します。

「春の陽は眼差しみたいに生きてい／る ほんの少しの人が気づいてる」(永井貴志) 京都府  
「春の陽」を人の眼差しのなかにある光と温度に還元する。「春の陽」のようにかろやかに。

「天国の心あたりを聞くように／プールの底へ触れたゆびさき」(豊富瑞歩) 茨城県  
「プールの底」には何か秘められているのだろう。泳ぐひとのからだの優美な曲線と、水中のスローモーションから、一瞬、人魚が見えた気がした。美しくも禁忌に触れたようなおののき。

「プールから／ぎんらりする腿ひきぬいて／星をぬすんでリップにのせて」(藤ほたる) 神奈川県  
水の表面張力を使った「ぎんらり」「腿ひきぬいて」という表現が、若い肉体の力強さ、その命の熱量を、驚くほどよく伝えている。さらに「リップ」の輝きが、そこに危うさを加えている。見事だと思う。

「私だったもの湯船からすくう度／透けた存在を信じている」(藤色) 京都府  
「私」の抜け殻のようなものに目を配り、見えない「私」を集めている。詩作の一つの営みが書かれている。

「まなうらに／ひとよひとよたまってく／水のやさしさ氷のかなしさ」(藤ほたる) 神奈川県  
「ひとよひとよ」が秀逸。「一夜一夜」なのか、それとも「一世一世」なのか。いずれにしても、平仮名表記にすることで、溜まっていく水の擬態語としても読ませ、作品に幅を与えている。

「とても速いエスカレーター／乗るときの力み／逆光 熱風 だれか」(郡司和斗) 茨城県  
夢のなかのワンシーンのような印象的な断片。私たちが忘れてしまった、この世に生まれおちた瞬間の記憶のようでもある。

「折り畳み傘を開く前の闇が／深海魚のように／雨の中に顔を出す」(まぢりこ) 埼玉県  
思いがけないところにある「闇」が、思いがけないところで明るみに出される。それでもなお「闇」は「闇」のままなのか。「深海魚」からどことなく漂うユーモアが、一つの答えのようで面白い。

「細い雨の降る川で／黙々と水切りをした／／あんな風にはもう／上手に側にいられない」(春町美月) 大阪府  
それがどれくらい骨の折れることだったかを語る最初の二行が、それがどれくらい愛情に裏打ちされたものだったかを語っているようで惹きつけられた。

「空き缶をズックに嵌めて／賑やかに独りで下校の／四キロある道」(加藤美紀) 愛知県  
どこか虚構じみた設定が、「独り」でいることのみさしただけでなく、その自意識のしらじらしさのようなものまで掬い上げている。その意味で高次元の作品。

「わからない手招きを見る／近づけば危ない人とノリと季節で」(豊富瑞歩) 茨城県  
危険なものは魅力的に映る。その魅力のタネはこの「わからない手招き」かもしれない。呼ばれてし

もう一歩手前にいるような高鳴りが伝わってくる。

「波打ち際の砂が／一瞬で乾いてしまうことを／なんの不思議にも思わなかった頃」(風船)東京都  
なぜか言葉がとても現実的な力を持っている。「乾く」かどうか、その真偽を超えて。

「ひとが靴を履くのを待つ沈黙／行間、／ 或いは／ 鶉の卵に あけた穴」(春町美月)大阪府  
名づけ得ない時間への熱い目配り。「沈黙」と「卵」の関係が明るみに出されている。

とりわけ今月は、よく磨かれた作品と多く出会うことができました。来月もお待ちしています。